STAND BY ME
OFF THE RADAR

知られざる葉山の青春

文:森下　茂男

自由と愛、
アートと異文化が交錯するサーフタウン、
葉山の海の系譜。

1977年、冬のノースショアに大きな北西のうねりが押し寄せるとき、サンセットのアウトサイドのいちばん奥に陣取っていたのはエディ・アイカウだった。そして、次にジェームス・ジョーンズ、それから3番目のポジションをキープしていたのが、ローカルのあいだから「グッドスイマー」と呼ばれていた無名の日本人サーファー、久保田優(まさる)だった。それから四半世紀の時を経た2001年1月20日、20歳になったばかりの無名の日本人サーファーが20フィートオーバーのワイメアを滑り降りた。久保田と同じ葉山のサーファー、佐久間洋之介だった。ハワイ・ノースショアのサーフィンの歴史に足跡を残したふたりの日本人。すでに故人となったこのふたりのビッグウェイバーを生んだ葉山の海の系譜とは……。

葉山のツートップ、沼田光博(右)と久保田優(左)。1972年頃、七里ヶ浜。「僕はニコン(日本工学)に就職したんだ、ちょこっと。そしたら、あとから久保田も入社してきた。ふたりとも、すぐに辞めちゃったけどね。ちり紙交換もやったけど、3日ぐらいやれば5〜6万円稼げたから、そうするとふたりで千葉とかに波乗りに行っちゃうんだ、まじめに仕事をやらないから。毎日がそんなだった」(沼田談)

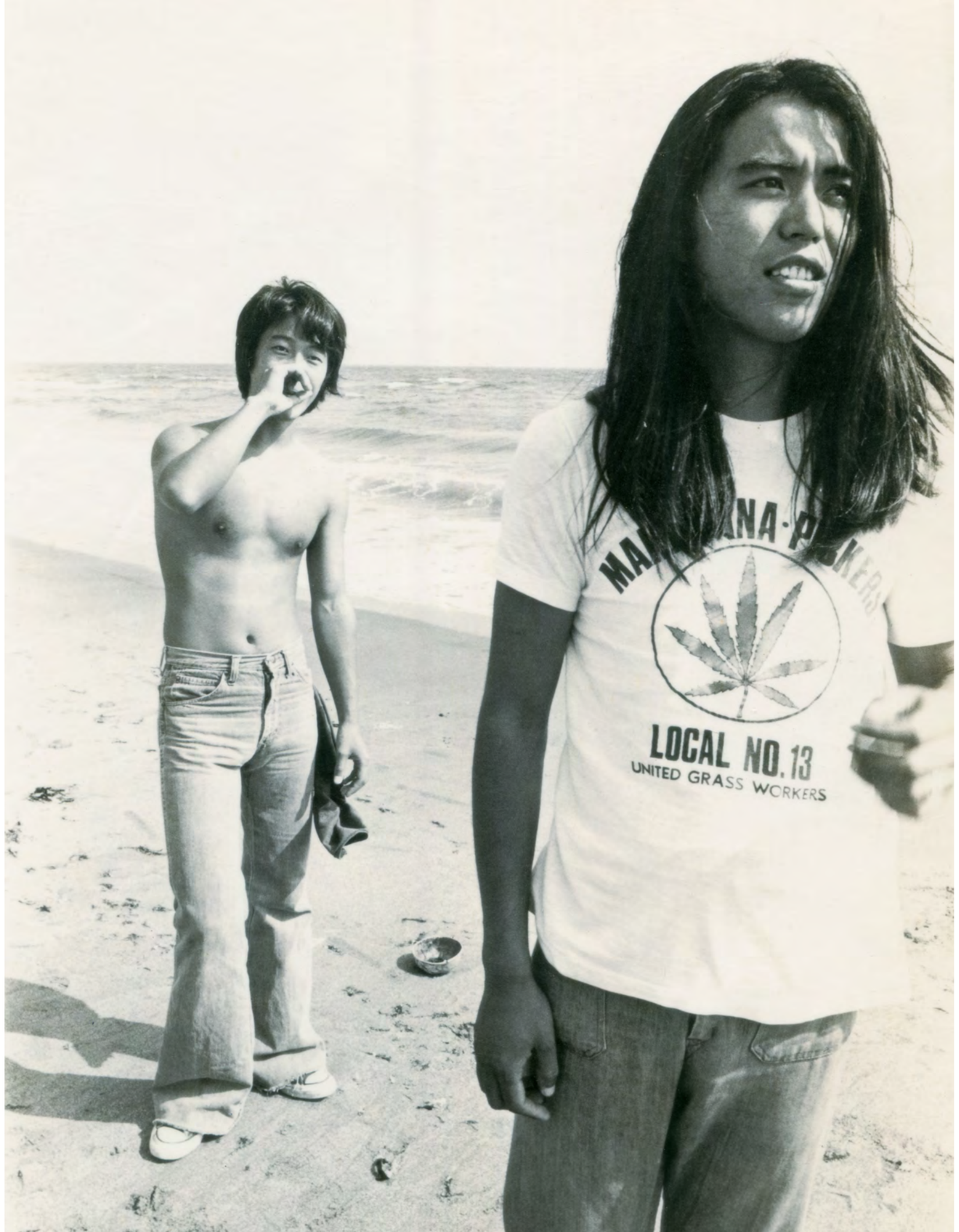

Photo by Taisuke Yokoyama

Top and Facing: photos by Hiroshi Sakuma Bottom: photo by Mitsuyuki Shibata.

（左）真名瀬、1994年9月。「台風のうねりが真名瀬にも入ってきて、爆裂していた。こんなに大きな波は真名瀬では見たことがなかった。4〜5人、入っていったけど、けっきょく、みんなスープにしか乗れなかったね」（佐久間談）　（右上）久保田優、西湘、1980年。「久保田が乗っている板は、おれが79年にハワイに行ったときに買ったライトニングボルトで、7'10"のサンセット用ガン。彼は波乗りがうまかったし、ヒッピーだったね」（佐久間談）　（右下）佐久間浩、大崎ライト、1979年。「あの台風20号が来る前のうねりだった。芝田くんが撮ってくれたんだけど、波乗りを終えてからおれもニコノスを持って海に入り、みんなを撮った」と佐久間は語るが、サーフィンをはじめて2年でグリーンのドアを叩くまでに上達した葉山サーファーの実力はいかんばかりか

葉山のツートップ

沼田光博がサーフィンを始めたのは1969年、日本大学藤沢高校を卒業してからだ。

「サーフィンは高校生のときに少しかじった程度で、本格的にやりはじめたのは高校を卒業してから。僕が一色海岸でサーフィンしているのを見て、それから久保田も仲間4人を誘って始めたんだ。久保田とは僕の同級生に彼のいとこがいて、それで彼とは高校時代から仲がよかった。当時、森戸もいい波が立っていた。まだ森戸神社の堤防がなくて、大きな低気圧や台風が来ると、湾に大きなうねりが入ってきて、きれいなグーフィーの波が割れたんだ。一色も正面でいい波が割れていた。今はもうだめになっちゃったけどね」と沼田は語る。

沼田のサーフィンを一色海岸で見ていた久保田優もまたサーフィンをスタートさせた。沼田の2年後輩の久保田も葉山で生まれ、葉山小学校、葉山中学校、横須賀工業高校へと進学する。横須賀工業高校では水泳部に所属し、国体を目指すほどの泳力を身につけ、それがのちにサーフィンに役立つこととなる。沼田も久保田も海辺の町、葉山で生まれ育ったわりにサーフィンをスタートするのが遅かったが、それはサーフボードも情報も不足していた日本のサーフィン黎明期としては普通のことなのだろう。沼田は、自分よりも先に葉山でサーフィンを始めた人たちが何人かいたと述懐する。

「一時、葉山にフリー・チャレンジャーという車のチームがあった。いわゆる首都高速を走りまわるサーキット族で、有名な車のチームだった。その先輩たちのあいだでサーフィンが盛り上がって、森戸や一色でやっていた。でも、彼らはすぐにやめちゃったし、鎌倉や湘南、西湘の人たちとの交流を考えると、葉山では僕と久保田が最初なんだろうね」

沼田は、久保田とは3、4年ほどいつもどこへ行くにもふたりで波乗りをしていた。

「葉山は台風のときはいい波が立つけど短いんだ。長く乗れない。ピークはうねりが3方向から集まってくるから、メチャクチャ掘れて大きな波になる。テイクオフがむずかしいけど、僕たちはそれで大きな波に乗れるようになったし、乗る度胸もついたし、自信になった。葉山は岩場だから、テイクオフ・ポイントは岩だらけで危ないけど、葉山にはそういうポイントしかなかったから、そこでやるしかなかった。サーフィンを始めてちょっと経ってから七里ヶ浜や西湘などに行きはじめたんだ。葉山の経験があったからほかの場所では平気だった。どこでも大きな波に乗れたので、顔も覚えてもらえたしね。久保田は特別にうまかったよ。あいつがサーフィンしていると、『だれ?』って聞きにくるもの。久保田は、ある意味、ローカルヒーローだったね」

また、沼田たちは、トランクスやワックスなどを売っていた鎌倉の「デューク」によく顔を出していた。「デューク」はテッド・サーフボードのテストライダーをしていた平井昭一がやっていたお店だが、そんなある日、お茶を飲もうとふたりで「デューク」に行くと、平井から声を掛けられる。「きみたち、葉山なのに、なんで大崎に入らないの?」と言われ、ふたりは葉山の向かい側の半島で割れる大崎の存在を初めて知った。

「台風になると、僕たちは小磯でやっていた。でも危ないし、大崎とカブネを教えてもらって通うようになるとぜんぜんイージーで長く乗れるから、小磯ではやらなくなってしまった」

横須賀のガラさん、葉山に現る

1970年代初め、葉山のローカルたちと交流をしていた横須賀のサーファーがいた。柄沢忠男ことガラさん（以下、ガラさん）だ。ガラさんは昭和18年（1943年）生まれで、旧日本海軍の軍港があった横須賀の長浦港で育った。ガラさんがサーフィンをはじめたのは1962年、彼が19歳のときだ。

「おれは高校を卒業した翌年の2月に横須賀の米海軍の基地で仕事を始めた。その年の6月、入梅どきに『サーフィンにどっか連れていってほしい』って、ふたりのアメリカ兵にたのまれたので、ムスタングのオープンカーにロングボードを2本積んで、湘南方面に出かけたんだ」

「ここがいいんじゃない」と、行った場所が七里ヶ浜のへの字だった。当時は観光バスの待機所になっていた砂利が敷きつめられた空地に車を駐車して、彼らのサーフィンを見ていたところ、上ってきたひとりが「ガラもやってみなよ」と、持っていたロングボードを貸してくれた。そして、持ってきていた海水パンツを履いて初めてサーフィンを体験した。

「おれの知っているかぎり、当時、だれもサーフィンしてなかったね」

ガラさんはアメリカ海軍の基地で仕事をするようになってから、「ヨットもサーフィンもアクアラング（スキューバダイビング）もすべてベースに入った瞬間からやりはじめていたので、本当にいそがしかった」と話す。

「土曜と日曜日は走水（横須賀・観音崎）でヨットレースの練習、チックタック（タッキング）の練習をやって、平日、波が立つとサーフィン。基地の中は日本と違って1時間単位で休暇が取れるんだ。朝早くサーフィンに行って、波がいいと2時間ぐらい遅くなっちゃって、遅刻したその2時間は休暇にしちゃうんだよ。民間と違ってそのへんはすごく融通が利いた」

サーフィンでは、千葉や湘南などにいそがしく出かけていたガラさんに、ある日、葉山に住んでいる友人のひとりが、「うちの前でサーフィンができそうだよ」と教えてくれた。

「波乗りができるみたいだから、葉山に遊びにこないかって誘われて行ったのが長者ケ崎。今でいう別荘前なんだ。波はいいし、すごくおもしろいところなんだ。以来、気に入っちゃって、その友人の別荘に板を預けて、別荘前に通うようになった」とガラさんは述懐する。

波がいい日が続いたある日、別荘前でサーフィンをしていたガラさんが上ろうとしたとき、20歳ぐらいの若者4〜5人が道路から見ていたという。そのうちのひとりが久保田だった。

「久保田は高校を卒業して、どこかの会社に勤めていたんじゃないの。おとなしくて無口だったよね。どちらかというと洋之介みたいな感じ。どこにいても、自分からワイワイ騒ぐというタイプじゃなかった。だまって人の話を聞いているような男。あいつは急にうまくなったね」

こうして、ガラさんと久保田、沼田たち葉山ローカルたちとの交流が始まる。沼田はガラさんとの出会いについて、「ガラさんと知りあったのは、僕が波乗りをはじめて3、4年ぐらい経ってから。僕たちは一色でやったり、長者ケ崎の駐車場ポイントでやったりしていて、ガラさんは岬の反対側の別荘前というポイントでやっていた。横須賀のダイビングショップの人の別荘があって、ホビーキャットなども置いてあった。ガラさんはヨットもやっていて、ヨットマンとしても有名だった」と語った。

久保田、3回目のハワイで歴史を作る

沼田の記憶では、1974〜75年にジャクソン・ブラウンのコンサートが横浜であったという。

「たぶんアルバム『レイト・フォー・ザ・スカイ』が発売されたあとだと思う。横浜で1回だけコンサートがあるって聞いたので、僕と久保田のふたりで車で向かったんだけど、すごい雨が降っていて、金沢八景で後ろから80キロぐらいのスピードで追突されたんだ。で、事故の現場検証をやっている最中に、警察の人から『あんた、入院したほうがいいんじゃないか』って言われたんだけど、『どうしても用事があるから』って、事故現場をあとにして『痛い、痛い』って言いながら、そのままその事故った車でコンサートに行ったんだ」

コンサートは最高だったそうで、バックステージでは前の年に生まれた子どもを抱くジャクソン・ブラウンを見て満足した沼田は、翌日、病院に直行してそれから1カ月ほど入院した。久保田は、見たところほとんど怪我もなかったが、その事故による保険見舞い金が50〜60万円ほど入り、そのお金でハワイに向かった。

「久保田が言うには、『11月ごろに冬のうねりが入りはじめるから、それまでにノースショアに入らないと、乗れるようにはならない』って、覚悟を決めてハワイに向かったんだ。僕は久保田を空港まで送りとどけたよ」

久保田は、最初のハワイはガラさんの新婚旅行に同行し、マカハでサーフィンし、2回目はドロップアウトのツアーで行き2カ月ほど滞在した。そして3回目のハワイについて、生前、久保田は次のように語っていた。

「ハワイ3回目のトリップは25歳のとき、住むつもりで行った。サンセットの10フィートの波に乗ろうと決心して行ったんだ。最初は、ハレイワのハレイワサーフというアパートでカメラマンの佐藤傳次郎と少しのあいだ、ルームメイトだった。家賃が高かったから、サンセットビーチの山側のアパートで、ダン・フレッキー※1の部屋に住まわせてもらった。当時はまだノーリーシュの時代。サンセットで板を流しても、岸まで戻ってくるのが速かったので、ローカルのあいだでは『グッドスイマー』って呼ばれていた。当時、サンセットポイントのいちばん奥にいたのがエディ・アイカウで、次がジェームス・ジョーンズ、そして3番目をおれが陣取っていた。でも、サンセットの10フィートオーバーの波をメイクできたことで、コンペティターとしての自分は燃え尽きてしまった」

※1 1952年生まれ。1970年代を中心に活躍したカリフォルニア・ニューポートビーチ出身のプロサーファー。頻繁に来日し、日本のサーファーにはなじみ深い存在。

洋之介の父、佐久間浩

佐久間浩が初めてサーフィンなるスポーツを、驚嘆しながら見たのは1964年のオリンピックの年で、場所は森戸海岸だった。

「『すごいよ、板の上に立っているよ』って、驚いたよ。それまで板の上に立つのなんか見たことがなかったからね。おれたちはフロートって言うの?ゴム製のマットか洗濯板で、波打ち際でやっていた。腰ぐらいの深さのところで待っていて、スープをつかまえて乗るんだよ」

佐久間がサーフィンを始めたのは'78年と、沼田や久保田より7、8年ほど遅かったのは、高校卒業後にはじめたモトクロスにハマっていたからだ。「高校を卒業してからモトクロスにハマり、大会に出場するためにバイクをチューンナップしたり、新しいバイクを買ったりしていたけど、お金が尽きたので、22歳のときにモトクロスはギブアップした」

その後、佐久間は父親が経営する不動産業を手伝いながら鎌倉にあるボクシングジムに通っていたが、ある日、友だちに誘われて、横須賀にサーフィン映画『メニー・クラッシック・モーメント』を観にいく。

「『なに、これ、気持ちよさそうにやっていて』と、それを観てサーフィンに興味を持ったんだ。それで、同級生の友だちに一色海岸にサーフィンに連れていってもらったのが始まり。サーフィンを始めたのは24歳だから、仕事を手伝って3〜4年経っていた。久保田は歳がひとつ上なんで、小学校も中学校も学年がひとつ上。だから、いつも呼び捨てで、威張っていたね。『なんだよ〜、おまえ。波乗り、始めたのかよ』って、言われたよ。海では同じ学校だったので、葉山のサーファーは全員顔見知り。彼らは5〜6年、おれよりサーフィンを始めるのが早かったから、おれがやるころにはみんなうまかった。とくに久保田はうまかったね。でも、彼は飲むと瞬間湯沸かし器で、すぐにキレるんだ。ニコンに入社して、上司をぶっ飛ばして退職したぐらい、喧嘩っ早かった」

'78年、24歳でサーフィンを始めた佐久間は、同時にニコノスを購入し、サーフィンの合間には水中写真も撮りはじめた。

「サーフィンを始めてすぐにニコノスを買いに新宿のヨドバシカメラに行ったんだ。サーフィンしながら、サーフィンの写真も撮りたいって思ってね。いい写真が撮れると気持ちがいいね。波乗りも好きだけど、写真が残るということはいいなって思った」

こうして、沼田や久保田、ガラさんなど友人たち、そしてふたりの息子たちのサーフィンやスナップを撮りつづけている佐久間の膨大な写真コレクションは現在にいたっている。

Photo by Hiroshi Sakuma

長者ケ崎別荘前ポイント、1980年。「横浜にあった船底の点検や清掃をやる会社、アンダーウォータークリーニングのオーナーだった林さんの別荘にガラさんが転がり込んでいたんだ。葉山のサーファーたちはガラさんと知りあってから、ここでサーフィンするようになった。この別荘はすでに取り壊されて、今はない」（佐久間談）

サーファーの梁山泊（りょうざんぱく）

沼田が久保田たちと葉山の水源地の近くの外人ハウスでシェアハウスを始めたのは1977年ごろで、そこで2年ほど共同生活を送っていた。

「僕と久保田で家を借りることになったら、ニシ（西岡昌典）※2が一緒に住みたいというので、3人で住みはじめたんだ。シェアハウスっていう概念はその当時にはなかったけど、友だち同士で住むっていうのはアメリカで経験していたので、じゃあ、みんなでお金を出しあって住もうかっていうことになって、葉山で一軒家を借りたんだ」と沼田は話す。

葉山の外人ハウスで暮らしはじめたある日、「池袋の西武百貨店でデモンストレーション用に作ったランページが、イベントが終わったので解体するけど、いらないか?」という連絡が西岡に入った。西岡もアキ秋山※3らとそのイベントに参加していた。

「借りた家には広い庭があったので、『じゃあ、大工もいるし、捨てるんだったら、もらおうか』って、持ってきてもらったんだ。それで、ストレートな部分は取ってしまってハーフパイプに改造して設置した。でも最初、みんな乗れない。ニシだって、最初は乗れなかった。でも、ニシは一週間ぐらい練習したらもう乗れるようになったよ。そのランページにはニシの軍団、ビンセント・ハチヤやトム・チャーチといったハーフのヨーハイ（横浜や横須賀の不良外人）たちが乗りにきていた。最初、あいつらも乗れなかったけど、ニシは鬼だから、ビシビシやっていたよ。ランページの上から見ると、足もとなんか見えない。よくやるよね。コアなスケーターはみんな来ていたんじゃないの。ランページを見たガラさんは葉山の木古庭というところに家を借りていたので、その家の庭にランページを作ったんだ。ガラさんは『これは乗れない』って、自分で作ったんだ」と沼田は解説する。

この外人ハウスには数多くのサーファーやスケーター、そしてアーティストが集まってきていた。この葉山の水源地近くの外人ハウスの物件を紹介したのはもちろん佐久間不動産。

「沼ちゃんたちが住んだその外人ハウスはいまも健在で、敷地は100坪ぐらいあるんじゃないの。そこにヒッピーが集まって、ランページまで作っちゃったわけ。ニシとか横須賀の悪いのとか、カメラマンのタイちゃん（横山泰介）やライターのリク（江本陸）、ウェットスーツ・メーカーの岡本（典彦）、ガラさんなどが集まってきていて、サーファーの梁山泊（有志の巣窟）になっていたね。そういう意味でもこの外人ハウスは創造的でおもしろかった。シェアハウスという概念でも時代を先取りした話題性のあるハウスだった。ある意味、ミニ・ドッグタウンでもあったね」と佐久間は、葉山だからこその外人ハウスを評価した。

※2 1952年生まれ、2014年没。1970年代から活躍したプロスケーター、アーティスト。そのアグレッシブな生きざまは、本誌3.3号に特集記事として紹介されている。
※3 秋山弘宣。1957生まれ。日本のスケートボード黎明期からプロスケーターとしてシーンを牽引しつづけてきたスーパースケーター。

This page: photo by Courtesy of Sakuma Collections. Facing photo by Yoshihisa Hatakeyama

佐久間洋之介、誕生

佐久間洋之介は1980年12月6日、佐久間浩の長男として葉山で生まれる。父親の佐久間は、海を表す「洋」の字に、之（これ）を介（かい）する、つまり海には国境がないという思いを込めて命名した。佐久間はサーフィンやヨット、スキューバダイビング、キャンプなどアウトドア全般に精通していて、洋之介は小さいころから海や山へ父親と一緒に出かけていた。

「洋之介は、海の遊びはいろいろ自発的にやっていたね。釣り、潜り、水上スキー、サーフィン。あとキャンプもしたし、アウトドアは全般にやっていた。おれは好きでやっていたんだけど、洋之介はついてくるんだ、『行く、行く』とか言ってね」と佐久間は語るが、サーフィンにしても何にしても、父親から「やれ」と、洋之介に強要したことは一度もないという。

ガラさんは、前から佐久間が赤ん坊を抱いていたのを見ていたので、洋之介が佐久間の息子だということは知っていたが、洋之介との出会いはある意味衝撃的だったと明かす。

「台風のスウェルで長者ケ崎の別荘前がよくて入ってたんだ。それで最後に1本決めて砂浜まで乗って上ろうとしたら、10メートルぐらい離れた波打ち際で子どもがおぼれかかっているんだよ。おれはびっくりしちゃって、板を放り投げて走っていったら、どうもおぼれているわけじゃない。巻かれながら、波と遊んでんだよ。もう夕方で、『危ねえなー』って見ていたら、その子はまた波に飛び込んでいって、ボディサーフィンをやっているんだ。あたりを見わたしたら、佐久間がいるんだ。聞いたら、『うちの洋之介だよ』って。洋之介が幼稚園ぐらいのときだね」

洋之介もまたガラさんの存在は、物心がついたころから知っていたと生前語っている。

「いつも海にいる、漁師というか海の男みたいな人がいて、それがガラさんだった。釣りとか潜りを教えてもらったんです。潜りを始めるとまた海の見え方が変わったかな。最初はガラさんとかおやじが貝などを捕っているのを見て、『おれも捕りてえ』って思ったんです。最初に捕ったときは、純粋にうれしかったですね。家から海まで歩いていけたので、学校が終わったら毎日海に行って釣りをしようかな、潜りをしようかなって、海はすごく楽しい遊び場でした」

あるとき、モーターボートで葉山沖に出た佐久間とガラさんは、ボートに洋之介を残して潜りの競争を始めた。18メートル近くの深みを潜るふたりを見ていた洋之介は、自分も海に飛び込み、自分の力で6メートル、8メートルと潜り、水圧に耐える心肺機能を高め、培（つちか）っていった。

洋之介がサーフィンを始めたのは中学2年の夏だ。仲のよい同級生の沼田裕一と一緒に始めた。初めてやったときにすぐに立てたそうで、その感覚がすごく気持ちよかったと、父親に話していたという。そのときからサーフィンは、洋之介にとって宝物のような存在になったのだ。ガラさんは、あの衝撃的な洋之介との出会いのあと、一緒にキャンプに行ったり釣りに行ったりとなにかと目をかけていた。

「洋之介は下山口の河口で沼田裕一とボディボードをやっていて、おれに『サーフィンをやりたいんだ』って言うから、中古で乗らない板を集めて、長者の下に連れていってやらせたんだ。そしたら、あいつらは朝から晩までずっとやっていたのよ。あっという間にうまくなったね。チャリンコで西湘まで行ったり、湘南のそこいらじゅうでやっていた。洋之介は人の3倍も4倍も多くやっていたんじゃないの。何をやるにもどこか人とは違っていた。けっして、目立とうというタイプじゃなかったけどね。海に入るとメチャクチャ目立っていたけど、陸（おか）にあがるとボーとしていておとなしかったね」

プロサーファー、佐久間洋之介

中学を卒業した洋之介は、父親に「プロサーファーになる」と宣言した。佐久間は、「テイクオフした瞬間に味わった至福感、昂揚感はなににも変え難いよ。洋之介もサーフィンした瞬間にハマっちゃったんだろうね。それで、洋之介が16歳のころに『おやじ、おれはノースショアに行きたい』って言われたとき、バブルが弾けたあとで、おれのポケットには500円玉しか入ってなかった」と述懐する。それでも、旅行費用を捻出した佐久間は、洋之介を連れてハワイへと旅立つ。後年、雑誌『サーフィング湘南』のインタビューで洋之介はそのときの様子を次のように語っている。

「雑誌などを見ていて、純粋にノースショアに行きたいって思ったので、春に10日間、父親に連れていってもらったんです。最初、マウイに行って、佐藤（傳次郎）さんを紹介してもらって、そのあと、初めてノースショアに行ったんですよ。3〜4フィートのサンセットに入ったときに『海はでかいな』って感じましたね。うねりの厚みも違うし、けっこうカルチャーショックでした」

その年の冬には、洋之介は初めてひとりでノースショアに行き、3カ月ほど滞在する。

「英語も満足に話せないのに、ひとりで行っちゃったんだからさ。最初のハワイのときに出会ったレイモンド※4に『預かってくれ』って頼んだんだよ。そしたら『16歳の子どもを預かるのは怖い。ノースの冬の波で洋之介の身になにかあったら責任を取れないので、勘弁してくれ』って、断られたんだよ。でも洋之介には、『行ってドアをノックすればなんとかなるから、とりあえず訪ねてみろ』って送りだした」と佐久間は語る。父親は息子を崖の上から突きおとしたのだ。洋之介はそのときのノースショアの生活について前述のインタビューで次のように語っている。

「レイモンドさんの家はケイキビーチの前にあり、なんとか1カ月は泊めさせてもらいました。おれはチャリンコでベルジーランドまで行き、そこでやってました。でも波のサイズが大きくなると、家から歩いていけるピンボールでやりましたね。

（左頁）水源地そばの葉山外人ハウスの庭に設置された手作りのランページ、1980年ごろ。「ニシと初めて会ったのは横須賀なんだ。ロッカークラブっていうお店があって、そこで安いTシャツやジーパンなどを売っていた。アメリカかぶれの時代で、ぼくたちはそこに買いにいっていたんだけど、その店にニシがバイクで現れたんだ。ニシとはそれ以来のつきあい。今思うと、ニシはすごくハングリーで、いつどこへ行くにもスケートボードを持っていて、ちゃんとスケートボードでメシを食っていた。でも、外人ハウスで僕たちと一緒に住んでいたときが、いちばん輝いていた時期だったんじゃないかな」（沼田談）（上）葉山の長柄の山でキャンプ、1989〜90年ごろ。左から、佐久間浩、洋之介、ガラさん、洋之介の友だちの山崎くん

This page: photo by Hiroshi Sakuma. Facing: photo by Kimiro Kondo

（左）佐久間洋之介、ワイメア、2001年。「『板を返してワイメアを乗ったのはおまえが初めてで、感動した』と、ブラックショーツの人が『板に貼れ』って、フイ・オ・ヘエナル（ブラックショーツの正式名称）のステッカーをくれたんだって。日本に帰ってきた洋之介は『パパ、保険をもらったから、もう大丈夫だよ』って言っていた」（佐久間談）　（上）「洋之介とガラさんの関係性がわかる写真」とのリクエストに、この写真がピックアップされた。「小磯のドロップインは洋之介とのあうんの呼吸なんだよ。洋之介はおれのほうを見て、笑っているんだよ。ふたりで乗っているところは貴重なんだよ、本当。あと2〜3枚しかないもの、貴重だよ。仲のいい者同士だったらレベルもわかっているし、生きた波に一緒に乗るのはいいよね」（ガラさん談）

やっぱりノースショアというところはすごいところでした。ぜったいに毎年行かなければいけない場所ですね」

※4 レイモンド・クエール。1979年に佐久間浩が初めて行ったハワイ・ノースショアで友だちになったローカルで、以来、親交を続けている。

洋之介、ワイメアにチャージ

その翌年、ノースショアにいた洋之介は、堀口真平が父親の堀口元気とともにワイメアに入っていくのを見かけていた。そのとき、洋之介は17歳、真平は洋之介よりも2歳年下の15歳だった。真平という手に届く身近な存在が、洋之介の背中をワイメアへと押しだした。それまでの洋之介はワイメアといえばピンボールであり、長い板を持っていないのもワイメアへ向かわないひとつの言いわけとなっていたと、父親の佐久間は話す。

「『年下の真平が入っていったのを見て、すごく刺激された』って洋之介は言っていたね」

それ以降、洋之介はワイメアに波が立つときは積極的に入っていった。ワイメアに入らなければ、いつまでたっても入ることができないことを、洋之介は今までの経験から学んでいた。

洋之介は「2歳年下のあいつが行くのだから」と、12フィートのワイメアに積極的にチャージしつづけた。それからハワイ2シーズン後の2001年1月20日、20歳になったばかりの洋之介は20フィートオーバーのワイメアをメイクし、その姿は近藤公朗によって記録された。しかし、写真が撮られメディアに取り上げられたことを洋之介は素直には喜べなかった。「その前から自分はあのくらいの波は乗っていたし、なんで気づいてくれないんだ」と、洋之介はそんな不満を父親に漏らしていた。しかし、洋之介は撮られて有名になったので、余計にそう言うんだろうと父親は推測している。その後、しばらくすると「ビッグウェイバー」というレッテルを貼られることさえ洋之介は嫌うようになっていった。「ただビッグウェイバーと言われるのは好きじゃねえよ。おれは小さい波もチャージしてるし、大会も目指している。小さい波をバカにしてやらないわけじゃないよ」と洋之介は自分の気持ちを父親に吐露していた。そういえば、こんなことがあったと、佐久間は話しはじめる。

「近藤さんが撮影したワイメアの写真を見ながら、おれが『サイズはどのぐらいあったんだ?』って聞いたら、洋之介は『オーバーヘッド』って、そっけない答えなんだよ。オーバーヘッドには違いないけどね」と、笑いながらそんなエピソードを披露した。

「いつかは久保田くんより大きな波に乗ってやる!」と、心に誓ってノースショアに出かけ、偉業を成し遂げた洋之介に対して、生前、久保田は単純に喜んでいた。

「正直言って、洋之介がワイメアを滑ったときは『やられたな』って、思ったね。おれはワイメアをできなかったから。あいつ、ああ見えておれたちをたたきのめさないと、気がすまないみたいだよ。ワイメアも、プロサーファーもおれができなかったことを洋之介がやってくれればいいんだよ。本当、見ているだけでわくわくするよ。まるで自分がやっているように錯覚する感覚なんだよ」

2006年1月2日、洋之介、死す。

洋之介は、ジョーズ、トドスサントス、マーベリックスなどの世界に名だたるビッグウェイブ・ポイントヘトウインで挑戦する目標を立て、そのため、今以上にポテンシャルを高めようと、新年早々から地元葉山沖でフリーダイビングのトレーニング中に遭難死してしまった。父親が持つ佐久間小屋の目の前の海でだ。

今こうしてみると、洋之介の海での活動範囲は、ある意味サーファーという枠を越えていたともいえる。2005年には小豆島から山口まで300kmをオーシャン・カヤックでキャラバンしながら走破し、沖縄ではサバニ※5にトライし、また、沖縄から名古屋まで航海したウミンチュ丸に室戸から和歌山までクルーとして乗船していた。それは彼自身、最終的にホクレア号のクルーの一員としてハワイからタヒチ間を航海するという目標を持ち、それに向かってナビゲーションの経験と技術のマスターに努めていたのだ。

洋之介の海での活動の軌跡を追っていくとその先に見えてくるのは、洋之介がもっとも尊敬していた人物、第2回ホクレア号の航海で遭難死したあの伝説のビッグウェイバー、エディ・アイカウだ。ワイメアベイ、ジョーズ、トドスサントス、マーベリックスなどへのビッグウェイブ・チャレンジを経て、ホクレア号のクルーになることとエディ・アイカウ・メモリアルコンテストへ招待されることが夢であり目標としていた洋之介。それはすべて、本物の海の男であるエディ・アイカウへとつながっていくのであった。しかし、今となってはそれも潰えてしまった。

※5 鰆舟。南西諸島で古くから使われる漁船の名称。

洋之介の継承者、佐久間泰介

洋之介の2歳違いの弟、佐久間泰介は1982年8月5日に葉山で生まれ、そこで育つ。泰介がサーフィンを始めたのは洋之介と同じ中学2年のときだ。父親の佐久間は「洋之介と違い、泰介は一日中家の中でテレビゲームをして遊んでいる痩せた少年だったけど、あるとき洋之介が泰介をサーフィンに連れだしたんだ」と語る。そのときのことは鮮明に覚えていると泰介は言う。

「中学2年の6月だったと思います。おれが14歳ですね。兄貴に誘われて、長者ケ崎に入ったんです。『これでやれ』って、渡されたボロボロの板でやりました。その日のうちに立てましたね。ハマったどころじゃないですよ」

波乗りにハマった泰介は、それ以来、兄の背中を追う毎日だった。

「兄貴と一緒についていって、いろいろ教わったかな。でも、おれが始めたのが14歳の夏前なのに、いきなり小磯のダブルぐらいの波に、『おまえ、やれ』って連れていかれて、とにかく兄貴はサーフィンに関してはメチャクチャ厳しかったですね」

泰介がでかい波にチャレンジしはじめたのは、彼が17歳になってからだ。

洋之介に誘われて出かけた初めてのハワイがきっかけだった。
「高校2年の冬休みを前に、洋之介が『もしよければ、1週間でもいいから、来れば』って誘ってくれたんです。それで学校の担任の先生に許可を取って、修業を積もうという気持ちでハワイに行きました」
　ハワイでは、洋之介とはほぼ別行動だったと泰介は言う。
「洋之介はあまり一緒に入ってくれなくて、(沼田) 裕一とかまわりの連中がサポートしてくれて一緒にやってくれました。そのころ、洋之介はワイメアなどで、でかい波をガンガン滑っていたので、なかなか一緒に入るタイミングもなかったし。たとえば、サンセットに一緒に入っても、兄貴は奥の10〜12フィートぐらいの波を待っていて、おれは手前の4〜6フィートのインサイドボウルにいたので、すれ違いでした」
　兄弟の心のすれ違いも多かったようだ。父親の佐久間は「『なんで兄貴ばかり雑誌に取りあげられるんだ』って、泰介は不平を言っていたこともあった」と言う。
「もっとこうしろとかああしろとか、上から目線で言われていたし、自分としてはなんかちょっとやられすぎている部分があったので、反発してました。でも兄弟ですから、今なら、兄貴のその思いはわかるんですけど」と泰介は反省する。ハワイではこんなこともあった。
「パイプはワイメアやサンセットと違って、掘れる波なのでかなり危ないんですよ。おれもちょっと無茶なところがあって、行こうとすると、『今日のコンデションじゃ、おまえのレベルじゃ無理だから、やめとけ』とか、そういうところはちゃんと教えてくれた。いま思えば、弟思いだったんですかね」

「洋之介メモリアルカップ葉山」

2014年から毎年夏になると葉山の小磯でウェイティングに入るビッグウェイブ・イベント、「洋之介メモリアルカップ葉山」は、2009年に泰介が主催者として始めた「葉山マリンフェスタ(旧洋之介ファンフェスタ)」の延長線上のイベントだと泰介は言う。
「洋之介が死んだときに海に恩返しがしたいなという思いがあって、葉山だったら、サーフィンだけじゃなくて、ヨットやウインドサーフィン、アウトリガーカヌーもあるし、カヤックもあり、いろいろなことができるので、それを少しでも子どもたちに教えて、世の中のためになるならばと始めたのが『葉山マリンフェスタ』です。その延長線上で何かできないかと企画したのが『洋之介メモリアルカップ葉山』なんです。世界のビッグウェイブ・シーンでは元プロサーファーたちが、ジェットスキーでのレスキューとかウォーターリスクについての啓蒙活動をやっているじゃないですか。むずかしい日本の行政のなかで、ビッグウェイブが世の中に認められればいいなって思って、大会という形で始めました。大会という形でやっていかないと、ウォーターリスクなどのことなんて、だれも見向きもしないんです」と泰介は力説する。
「洋之介メモリアルカップ葉山」の開催基準は8〜10フィートの波で、災害が発生していないという条件がつく。
「日本は災害が多い国ですし、もし災害が起こっている状況下で大会を開催すると、社会的な目が厳しくなるのでやれません。基本的には台風が九州の下あたりで停滞していて、晴れた日の南西のグランドスウェルがベストですね」と泰介は解説する。8月から10月末までの3カ月がウェイティング期間で、招待選手は30名ほどだ。
「招待選手は洋之介メモリアルカップ実行委員会という組織があり、そこで選びます。おれは最終的にチェックする係りです。招待状は30名ほどに出すんですけど、日本全国から呼んでいるので、実際、やるといっても来られるのは10名程度です。だから多めに選んでます」
　最後に泰介は、小磯に対する自分の思いを語った。
「洋之介が愛したポイントでもあるし、地元でこんなにすごい波が立つんだったら、単純に極めたいなって思ってます。やはり洋之介ですら極められなかったわけですから。ワイメアの20フィートは乗れても、小磯はなかなか乗りこなせない。極めるということはこのスポーツではなかなかないのですが、わかりやすく言えば、極めたいなっていうことですね」

エピローグ

サンセットの大波を滑ったことでプロサーファーになるという夢が燃え尽きた久保田が、ハワイの海で得たものが光の美しさであった。チューブの中やスラッシュしたときに見た光の躍動感、変幻自在に色が変化する光の美しさに魅せられた久保田がライフワークとして取り組んだのがステンドグラス・アーティストだった。しかし2010年、惜しくも事故で他界してしまった。そして、サーフショップの経営などを経てリフォーム業をはじめた沼田は、10年ほど前に念願のライブハウスを「ザ・ロード・アンド・ザ・スカイ」の成瀬一郎とともにプロデュースした。その大崎のポイントを一望する逗子の崖の上に立つ「サーファーズ」はサーファーによるサーファーのためのライブハウスとして、日本のサーフカルチャーの発信地として新たな1ページを築いている。「サーファーズ」が立つその崖の上の土地はかつて佐久間不動産が所有していた物件であり、現在もイラストレーターとして、また写真家として活躍する佐久間も「サーファーズ」のサポートを続けている。また、来年(2022年)79歳を迎えるガラさんは今でも現役バリバリのサーファーである。丸60年、日本屈指の長きにわたってサーフィンライフを続けているが、現在進行形のガラさんの人生そのものがアートといえる。洋之介もまた急逝する数年前からプロサーファーの枠を超え、活動範囲を広げていた。そのひとつが、洋之介が渾身のエネルギーを注いでプロデュースしたサーフムービー『ダンシング・オン・ザ・ワット』だ。この映画のエンドロールで、「葉山があなたたちのサーフスポットなんだ」と千葉のローカル、蛸優樹に言わせしめたが、この言葉こそまさに洋之介が葉山で生まれ育ったことへのプライドと地元へのリスペクトなのだろう。愛とやさしさに満ち、自由気ままでハイセンスに生きる、そして、ひとり、サバイヴする……。そんな葉山の独創的なウォーターマン・ライフスタイルは葉山の海の男たちによって脈々と受け継がれ、そして次世代へとつながれながら、新たな系譜を紡いでゆく。

(左)「洋之介メモリアルカップ葉山」のエキジビションでのセレモニー。葉山公園、2016年。2014年に始まったこの大会はまだ正式には一度も開催されていない。　(右) 佐久間泰介、小磯、2013年10月。「小磯はピークが決まっている。奥から行った人がピークを取れるんですけど、おれにとっては純粋にそれが楽しさなんですよね。それから、意外と手前の棚のほうが掘れるんです」(泰介談)
(次見開き) 佐久間洋之介、ファントム、2004年。初めてのトウインでこのビッグライディングが記録され、新たな可能性がしめされた

This page: photo by Ryo Ri. Facing photo by Hiroshi Sakuma

Photo by Naoya Kimoto